

「“ふつうの人”ってどんな人？」

薮田 直子（大阪教育大学）

突然ですが、あなたは自分が「普通だなあ。」と思うことはありますか？普通と思って安心する時もあれば、何の面白みもない、個性が無いなあという意味で使う時もありますよね。普通とは、読んで字の如く、あまねく（普）とおる（通）こと。広く通用するということで、ごくありふれている、通常であるといった意味があります。

では、「ふつう」の反対の言葉は、特別？ありふれていることの反対は珍しいということなので、「希少」も対置できるでしょうし、「通常」という意味で「ふつう」を捉えたら、その反対は「異常」になるのでしょうか？

例えばこんな事例で「ふつう」という言葉の意味をもう少し深く考えてみましょう。私は普段、電車で通勤しています。自分の足で歩いて、好きな時間に1人で電車を乗り降りし、駅の階段を駆け下りて、仕事場に向かいいます。「そんなの“ふつう”だ。何の変哲もない。」と思われるかもしれませんのが、ここで少し考えてみたいのです。

私たちの社会は、自分の足で二足歩行して移動することがデフォルト、「通常」や「普通」だと捉えられています。だから数年前に、足の靭帯のケガを経験したら、それはもう大変でした。階段の上り下りはとても怖くて時間がかかる。おまけに、後ろから来る人には迷惑そうに振り返られる。エレベーターを探しても、自分が降りたい出口とは反対側にしかなかったり…。

でもそんな私も、ケガが治り「ふつう」に歩ける日々が戻ってくると、そのことを忘れがちになります。誰の助けも借りず、「ふつう」に乗り降りできることは、実は「特權的」なことです。その人自身が何の努力をしなくとも、社会の側が自分のやり方に合わせてくれているからです。それこそが、自分が「普通」でいられることなのです。

社会があなた仕様になってしまっているほど、それ自体が「ふつう」で「当たり前」になり、自分が優位な立場にいることが見えなくなっていく。時折、駅員さんをホームで見かけることがあります。折りたたみのスロープを持って、車いすを使っている乗客と電車を待っているのです。これは「特別」な対応ですが、車いすユーザーが安全に、つまり「ふつう」に乗り降りするための当然の調整であり、特權的な対応ではありません。

社会によって「ふつう」は違います。ヨシタケシンスケさんの絵本『みえるとかみえないとか』（アリス館）では、宇宙のあらゆる星を調査している主人公が、うしろにも目があるひとたちが住む星に降り立ちます。前も後ろも同時に見ることができるその星の住人は、主人公を見て驚きます。「不便じゃない？」「自分の背中が見られないのは、かわいそう。」「ちゃんと歩けるの？」と。それに対して主人公はこう言います、「いやぼくはべつにこれがふつうだから。」あなたの日常にある「ふつう」を一度、見直してみませんか？